

方針と重点	市の基本施策	学校の教育目標	資質・能力を育てたい	基本施策との関わり	本年度新たな学校の重点	具体的な実践内容または観点 (手立てとしてどうか、または達成度かどうか)	評価 A S D	分析と改善点
方針・重点 ・未来社会を創造する資質・能力を身に付け、学び続ける子の育成 ・プレゼン教育・キャリア教育・ICT教育	⑤安全・安心で快適な学校環境の整備 ④DXをとり入れた教育の推進 ③学校の地域・関係団体との協働による郷土教育の推進 ②豊かな心、健やかな体を育み、生きて働く力を身に付ける教育の推進 ①豊かな心、健やかな体を育み、生きて働く力を身に付ける教育の推進	人間性豊かで、たくましく生き抜く生徒	対話を駆使して考えを深める生徒	対話から考えを深める学校	① 個別最適な学び・協働的な学びの推進	・学び方の自由度を高め、学習者の選択肢を増やす。 ・形成的評価を行い、積極的に学び方を価値づける。 ・授業時間の50%をグループまたは交流活動として、対話の機会を増やす。	B	・個別最適な学びに向けて、特定の教科で少人数学習を取り入れ、生徒の習熟度に合わせた授業を展開した。4人の学習グループを作り、協働的な学びを促した。 ・全国学調の「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている。」に当てはまると回答した生徒の割合は、県平均41.7%に対して本校は62.7%と高い数値を示した。仲間学びの価値を実感していることがわかる。 ・授業内でのグループ活動の割合を増やしたが、50%には満たない。今後も改善の余地がある。 ・総合的な学習のまとめにプレゼンを取り入れた。語り方やスライドショーの使い方にはまだ改善の余地がある。
				① 仲間と学ぶスキルの向上	A			
				④ ICT機器を活かしたプレゼン力の向上	B			
				一人一人居場所がある学校	① 変化を求め、願いをもち、実現に向けて考え行動する生徒の育成 ②	・日常、行事において変化を求めるための目標を設定させ、個別に支援する。 ・生徒の主体性を大切に生徒会運営を行う。	A	・アンケート結果では、「昨年度よりも頑張れた、変わることができた」と実感する生徒は約97%と高い数値を示した。頑張る姿を広め、仲間同士で認め合う場を意図的につくることで、生徒の変化と成長を促すことができた。 ・生徒の良さを具体的な姿で捉えて、生徒会が軸となり全校に広めながら活動を生み出していくことができた。 ・不登校生徒の割合は5.5%と目標には届かないが、関わりをもち続け、登校への意識をもたせる動きを担任、主任、学年職員など様々な立場で取り組むことができた。 ・アンケートを定期的に実施し、職員に周知すると共に、教育相談週間を設けたり、積極的にSCとつないだりすることで、生徒の困り感を拾い上げられるよう取り組んだ。
				① 不登校生徒への寄り添った対応と未然防止の充実 ②	・一人一人の困り感を理解し、対話を通じて居場所づくりや支援を進める。 ・不登校未然防止に関する職員研修を行う。 ・不登校生徒割合5%以下を目指す。	B		
				① いじめを許さない校風づくり	・SCを入れたSOSの出し方指導など、困り感を表出しやすい環境をつくる。 ・アンケートを実施(2カ月に1回)し、いじめの有無や、生活内の生徒の困り感を把握する。	B		
				故郷松倉に誇りをもてる学校	③ 地域と連携した「寝屋子プログラム」の充実	職業調べや職場体験、寝屋親さんとの交流を通して、「将来について考えている」と答える生徒の割合を70%にする。	B	・芸術鑑賞会や寝屋親さんを招待した寝屋子会など、地域の方とつながり、将来について考える機会をつくることのできた。今後は、それらの活動がより日常生活とつながり、将来を具体的にイメージしていけるようにしたい。 ・現地調査、専門家による講演、紹介用のプレゼン及び、松倉城やその周辺を再現したジオラマ作成、マスコットキャラクター考案を行った。当初10名ほどで始めた活動が、全校生徒が参画する活動となった。 ・地域住民を巻き込んだ講演会、保護者同士が相談できる「カタリバ」の開催、側溝掃除を取り入れた環境作業等、実行委員会を中心に新しい試みができた。学校と実行委員会の良好な関係性、密な連絡調整が奏功した。
				③ 松倉城を核とした地域探究活動の推進	生徒会執行部と歴史好き有志生徒を中心に、国の史跡に指定された松倉城を広める活動を行う。広める方法を高山市文化財課職員と協働しながら考え、実践する。	A		
				⑤ PTA実行委員と連携した学校環境整備の充実	実行委員会の連携を強化し、地域・保護者と協働したPTA活動の充実を図る。特に学校環境整備に力を入れる。□	A		

学校運営協議会における主な評価内容

・校長の願う「Agency」は、生徒だけでなく教職員にとっても必要な力である。子どもも大人も案外保守的であるため、変化を求めて新しい文化に挑戦し続ける学校であってほしい。
 ・次年度に向けて、帯活動や縦割り活動を中心とした教育課程の工夫を学校全体で力強く進めてほしい。
 ・「対話を駆使して考えを深める力」は様々な関わりからうまれる資質能力である。学校と地域が一体となり育んでいきたい。